



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESD通信

No. 8

2017.11.10

信州ESD
コンソーシアム
事務局

目次：ESD研修／HESDフォーラム／ESD研究会長野／ESD小事典／お知らせ

10月4日に附属研修教員のESD研修が行われました

教育学部において附属学校園の研修教員の先生方に向けた学部研修の中で「ESD(Education for Sustainable Development)からとらえる学びの姿」というテーマで講義を行いました。附属松本中4名、附属長野中3名、附属松本小2名、附属長野小2名、附属特別支援1名の計12名の先生方が受講しました。講義の中では、ESDが始まった経緯や理念、ESDを取り巻く社会の動きについて説明した後、先生方がこれまでされてきた授業や、現在、構想している授業についてESDの視点で見つめなおすグループワークを行いました。ESDを初めて知る先生方もいらっしゃいましたが、ユネスコスクールである附属松本中学校の先生方にとっては馴染みのある言葉のようでした。ESDに対する率直な疑問点もたくさん出していただき、とても有意義なディスカッションができました。(安達仁美)



10月7日にHESDフォーラムに参加しました

11回目を迎えるHESD(Higher Education for Sustainable Development)フォーラムは本年度は立命館大学びわこ・くさつキャンパスで開催され、初日の参加者は約35名でした。キャンパスは琵琶湖を望む高台に造成されており、開発前の森林を残す地域もあり、自然環境の保持につとめている。

フォーラムは、HESDフォーラム代表の阿部治(立教大学ESD研究所所長)、中島淳(立命館大学名誉教授)両氏の挨拶で開催された。引き続き、①立命館大学の山中司による「立命館大学におけるグローバル化の模索：「グローバル・フィールドワーク・プロジェクト」の試みを通して」、②滋賀県総合政策部企画調整課の望月敬之氏による「サステナブル滋賀の取組×SDGs」、③立命館大学アジア太平洋学部復学部長のMAHICHI Faezeh氏による「Utilization of Multicultural Collaborative Learning(MCL) for Sustainable Development in Higher Education : HESD Strategies in Ritsumeikan Asis Pacific University」の3氏の講演が行われた。

休憩をはさんで・立教大学、琉球大学、国連大学、北九州市立大学、北陸ESDコンソーシアム、立命館大学など各大学・活動団体からの事例報告が行われた。最後に特別講演として立命館常任理事の建山和由氏による「立命館における学びとEDGE+Rの取り組みについて」が行われた。

翌日の午前には、大阪工業大学、芝浦工業大学環境システム学科、京都大学特活プロジェクト、琉球大学エコロジカルキャンパス学生委員会、立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおけるSustainable Weekなど学生を中心に各大学・活動団体からの事例発表が行われた。(西一夫)

10月28日にESD研究会長野「新学習指導要領とESD授業づくり」開催されました

中部地方ESD支援センター主催、信州ESDコンソーシアム共催で信州大学教育学部で開催された。教員・学校関係者やNPO・団体・行政関係者などの参加者のほか、スタッフ(中部地方ESD支援センター、信州ESDコンソーシアム)、講師をあわせて36名が参加した。

講義は文科省教科調査官の渋谷一典氏による「新学習指導要領とESD授業」でそもそも学習指導要領とはの解説から始まり、今回の改訂での大きな以下のような変化について紹介いただいた。ESDという文言は直接には採用されなかったが「持続可能な社会づくり」が繰り返し記述されており、また「2030年の社会と子どもの未来」を想定

したSDGsと関連した内容となっている点がESDの視点からは重要である。氏は「総合的な学習の時間」を担当しており特にそこでの特徴として、目標は各学校が独自に定めるものであること、内容は「(現代的、地域の特色、児童の関心などに基づく)探求課題を通して(知識、表現力、人間性などの)具体的資質・能力を育成する」ことなどをあげ、カリキュラムマネジメントや具体的なカレンダーなども紹介して実にわかりやすく解説いただいた。質問では評価についてなど現場での苦心もあった。



事例紹介は山ノ内町立西小学校の須山千才氏による「西小学校でのESD授業」で、自然豊かな山ノ内北小学校での児童との防災教育にもつながる自然体験と、地域の特色であるユネスコエコパークやユネスコスクールとしての活動など多々興味深い事例を紹介いただいた。

後半は、6グループに分かれての討論で多様な立場からの意見で大いに盛り上がりそれぞれの簡単な紹介で締めくくった。今回は学校関係者外もおおく、普段は触れることのない学習指導要領など専門的ではあるが教育制度の基礎的な部分も知ることができ大いに有意義な会であった。(渡辺隆一)

「RCE エスポー (フィンランド)」の紹介 (2017年9月に訪問)

ESDコンソーシアムのワールドクラスバージョンであるフィンランドのRCE(国連大学が認定するESDの地域拠点)エスポーをご紹介します。RCEエスポーは、エスポー市全体でESDに取り組んでいる世界トップクラスのRCEです。エスポー市では、初等教育から高等教育まですべての教育機関においてESDが実施されており、すべての保育園と学校にはESDの実施計画があり、教育を受けた1人以上のエコサポーターが配置されています。また、いくつかの小学校と保育園で実施される教育プログラムでは、子供たちが意思決定に参加し、より持続可能な方向へと自らの行動を変化させています。RCEエスポーの先進的な取り組みは、信州ESDコンソーシアムの今後の活動にも大きなヒントを与えてくれるものと思います。(株丹洋一)



ESD小辞典

ふるさと学習、地域学習、信州学

新学習指導要領にESDという字句はありませんが、「持続可能な社会づくり」としてしっかりと位置づけられています。地域の課題を捉え、地域と協力してともうたわれています。小学校では米作りに限らず地域の特産野菜の栽培や干し柿作りなどの体験や伝統芸能の継承など地域との協働でふるさとの特徴や誇りを学ぶ活動はほとんどの学校が取り組んでいます。中学生では人口問題を地域、日本、世界の3視点から調べ、地域の過疎をどうしたらよいかと討論して文化祭で具体策まで発表する



例もあります。高校では2016年から、「長野県の風土を理解し地域に参加する『人財』育成」として信州学の資料集が全生徒に配布、活用され、地域の課題を高校生の力で解決しようとする提案も多数生まれています。また、信州型コミュニティスクールなど地域と協働する様々な教育制度も進んでおり、長野県では先のような既存の実践とうまく調整、連携、協働することで学校でのESDを無理なく進めることができるのではないのでしょうか。

お知らせ

12月2-3日にユネスコスクール全国大会が大牟田市で開催されます。信州ESDコンソーシアムからは長野県のユネスコスクール教員など17名が参加し全国のユネスコスクールと交流してきます。大きな成果が期待されます。



信州ESD通信

No.8 2017.11.10

発行：信州ESDコンソーシアム事務局 編集：渡辺隆一
〒380-8544 長野市西長野6 信州大学教育学部
事務局：白岩/大山 TEL026-238-4034 kyoesh@shinshu-u.ac.jp